

## ■ 編集だより

## 編集後記

本誌では、平成25年8月よりオンライン投稿システムを採用した。海外は元より、わが国でも同様のシステムを既に採用している雑誌が増えており、やっと導入された感がある。伝統ある本誌では、20歳代から後期高齢者まで購読者の年齢層が広いと、なかなか小回りが利かない。その中で、投稿していただく読者は比較的若く、この導入は歓迎されているものと信じている。

これに伴い、編集委員会の会議のあり方も変わりつつある。編集委員のメンバーは、北は北海道、南は九州からこの事務局のある本郷に毎月1回定期的に集まっている。査読担当の委員が前もって投稿された論文を熟読し、意見をまとめ、当日の会議で話し合っただけで決定していく作業が繰り返されている。当然短時間では終わらない。また毎回全員が出席することは難しい。この問題を解決すべく、電子媒体を用いた査読システムの導入が考えられた。しかし、顔の見えない中での委員のやり取りには不安が残る。細やかなニュアンスは伝わらない。1つの決定をするにあたって、ただ単純に多数決をすればいいものではなく、劣勢だった意見が、周囲の委員の気持ちを動かし、形勢が変わることも多々ある。これは感情に流されているのではなく、その意見を述べる査読者の形相から何かを感じ取って、もう一度考え直そうという試みがなされるからである。その査読者の熱意は、インターネット越しでは伝わらない。口調、身ぶり手ぶり、表情などのノンバーバルな表現に勝るものはない。インターネットでも相手の顔を見ながらコミュニケーションができるようになったので、このような問題は解決し乗り越えられるとの反論もあった。だが、同時に複数の顔を眺めながらの討論には到底その情報量の多さにはかなわない。

精神療法がインターネット上で普及しきれていないのがその証である。最近、WEBカンファレンスと称して、著名な先生の講演が職場の会議室で視聴できるようになった。わざわざ講演会場にまで足を運ばなくても、仕事の合間である昼食の時間を利用して、最近の情報が入手できる非常に便利な時代となった。ライブで行われているので、リアルタイムで直接演者に質問できるのである。大勢の前で質問することは気が引けるが、パソコンの画面を通してなら気楽にできてしまう。その利便性には感服するが、その反面、講演の臨場感に物足りなさを覚える。何か気の抜けた感じがする。DVDで視聴する演奏よりも生演奏の方が、どれだけ人の心に響くのか、それは明らかである。

そのような訳で、電子投稿システムの導入に伴って、編集会議のあり方の見直しが検討されたが、やはり従来通り一同が集まって話し合うことに決まった。この決定は編集会議の構成メンバーの年齢層に影響を受けていないとは言えない。現時点では人と人の繋がりを大切にしている集団であることに安堵している。

また、学会誌のオンラインジャーナル化の話も着々と進んでいる。保存するスペースを取らず、紙を使わないことでエコにもつながる。調べたい言葉を入力すれば簡単に検索もできるであろう。特に読者にとってはありがたい話である。電子媒体は半永久保存ができるということが謳い文句であるが、初老を迎え疑い深くなったのか心もとなく感じる。紙媒体は、病院や研究機関などの組織では、その保存に欠かせないのも事実である。また、紙には、人が触ったり、書き込んだりした形跡が残るもので、ディスプレイにはない温もりがある。このように賛否両論であるが、スマホを片手に歩いている人が巷で溢れている時代、この電子媒体を利用しないわけにはいかず、その利点を追求しつつ、人間的な繋がりと共存をいかに求めていくかを模索していかなくてはならないであろう。 忽滑谷 和孝